



第48回「おかねの作文」コンクール

曾祖母からの三千元

兵庫県・神戸市立有野北中学校 2年 程能 楓

私の財布には1,000円札が3枚入っている。この夏休みに、母の実家に行った時、大好きな曾祖母からいただいた、大事な3,000円だ。

90歳になる曾祖母は、手づくり人形を作り、販売している。曾祖母の作る人形は、型紙から手づくりで、布で丁寧に仕上げられている。私も小さい頃は抱っこして、一緒に寝るほど、可愛いがっていた人形だ。曾祖母が愛情を注ぎ、作り上げた人形の売り上げ金と年金生活の中から、私にくれた3,000円。曾祖母は、「楓、よく来てくれたね。何か必要な物があるでしょう。少ないけど大事に使ってね。」

と、私に言いながら、1,000円札を3枚、私の手の中に押しこんだ。同じ様に妹には2,000円を握らせていた。無駄遣いは出来ないと思った。

私は、よく母に、「お金を大事にきなさい。」と注意を受ける。母から見ると、私の買う物は、どうやら無駄遣いに見えるらしい。

先日、母と妹の3人でスーパーに買い物に行った。私と妹は、母から200円ずつもらい、

「好きな物を買ってきていいよ。」

と言われた。200円の理由は、税抜き表示の店のため、特に妹は100円では買えないことがよくあるからだ。私はすぐに、200円近くまでお菓子を決める事ができた。しかし、妹はずっとお菓子売場で悩んでいた。

「200円しかないし、早く決めて。」

と妹に言うと、妹は

「どうしようかな。こっちにしようかな。」

と、一つの商品を手にとって、戻して、他の商品を手にとってみたりと、なかなか買う物が決められずにいた。

その時、私ははっとした。まだ4歳の妹にとって、200円はとても高価なも

のであり、それは慎重に買うものを決めていた。

私はどうだろうか。200円を渡されたところで、たいした喜びも感じていないのが本音である。同じ金額なのに、使う人によって、価値が違うのだ。

あたり前の様にお小遣いをもらい、軽い気持ちで物を買っていた自分が恥ずかしく思えた。もっとお金は重みのあるものではなくてはならない。曾祖母や母の言葉の「大事に使う」の意味が、少し理解できた様に思えた。大事に使うという事は、価値のあるお金の使い方だと思う。

お金は便利なものだ。お金があれば、たいていの物が買える。お金の使われ方は様々だ。物ばかりではなく、目に見えないものにも、多くのお金が使われている事を母から聞いた。例えば、光熱費や、通信料、決まった額を支払っていく保険料など、私の通っている学習塾の費用の話も聞かされた。学習塾代は決して安くなく、金額には驚かされた。高額な学習塾代を支払い、通わせてもらっているのに、私は、毎日の授業に真剣に取り組めていただろうか。最初の頃、^{がんば}頑張って取り組んでいたけれど、何年か通いつけているうちに、その気持ちは薄れ、いい加減な行動を取ることもある。その時も学習塾代は支払わなければならない。テストの点が良くても、悪くても、支払いは発生する。申し訳ない気持ちになった。

私は、心の奥底で、塾に行かせてもらっている事が、あたり前だと思っていたのかもしれない。私は、私の意志で塾に通っている。今まで塾の宿題をいい加減にやってしまった時など、親から何度も塾を辞めるように促された事がある。その時も私は、塾を続ける選択をした。その意志を忘れずに、頑張ろうと思う。同じ金額でも、いい加減にするのではなく、努力をして、価値のある使い方したいと思う。

私の財布の中の曾祖母からの大切な3,000円。まだ、何に使えばいいのか正直、決まっていない。でも、今までの様な軽はずみな気持ちでは、使いたくないと思っている。お金の重みを考えて、価値のある買い物をしたいと考えている。そして、3,000円の使い道について、曾祖母に報告しようと思う。

